

鹿港民俗文物館・中国信託商業銀行「文薈館」を訪ねて ～辜振甫氏・辜濂松氏を偲ぶ(後編)～

亜細亜大学アジア研究所嘱託研究員
根橋玲子

台湾の五大家族の一つである鹿港辜家は、辜顕榮氏がファミリービジネスの基盤を築き、辜振甫氏、辜濂松氏、辜啓允氏、辜成允兄弟などに伝承された。清朝から日本統治時代、国民党の長期政権や2000年前半の民進党政権時代を経て、時代の変化に合わせて、ビジネスを継承してきた。辜振甫氏が創業し、現在は台湾有数の大手銀行となった中国信託商業銀行は、その後一族の後継者辜濂松氏に引き継がれたが、2013年1月6日に執り行われた辜濂松氏の告別式からも、既に2年以上が経過している。

本稿の前編では、辜家の歴史を辿るべく、筆者が2015年4月及び9月に訪問した¹ 鹿港民俗文物館と中国信託商業銀行「文薈館」について、2005年2月故辜振甫氏告別式で配布された同氏追想録「勁寒梅香：辜振甫人生紀實」（辜振甫人生記録）を参考に記述した。

後編では、辜振甫氏追想録に加え、辜濂松氏の告別式で配布された「辜濂松先生追悼集」から一部記述を引用しながら、故辜振甫氏、故辜濂松氏の人生を辿り、辜家繁栄の遠因を探る。

1. 「中國信託金融園區」と「生聲不息」

2014年12月2日、中国信託商業銀行本社ビルの南港への移転に伴い、中國信託金融園區 CTBC Financial Park（住所：台北市南港區經貿二路168號1樓）がオープンした。8万坪もの土地を造成した「中國信託金融園區」は、同社前会長であった辜濂松氏が自ら土地を選定し、本社ビルを設計



写真1 「中國信託金融園區」全景

出所：中国信託商業銀行提供

するなど、思い入れの深い事業であったという。とりわけ、同園區の入口には、多くの松が植林され「松の森」と呼ばれている。

「中國信託金融園區」には、中国信託商業銀行本社がある30階建オフィスビルのA棟のほか、20階建のB棟、14階建てのC棟の3棟の建物が造成されている。全体の建屋面積9,284坪を誇るこれら3棟のビルは、台湾の伝統的な「家」の精神を象徴する「山」の形に配置されている²。

同園區には、中国信託の関連企業のほか、ショッピングモールやレストランなどで勤務する約6,000名の従業員を収容しており、さらに4,827坪の公用スペースや3,641坪の公園緑地、その他8,500坪以上の広場を公共利用のために開放している。

中国信託商業銀行本社ビルであるA棟の1階ロビーには、中央に大型デジタル美術装置が配置されており、多くの訪問者の目を惹きつけている。「生聲不息」³と題したこの芸術作品は、前会長の

¹ 文薈館へは、開館直後の4月中旬に初めて訪問したが、再訪日の9月8日は図らずも辜濂松氏の誕生日であった。

² 2014年12月2日付卡優新聞網 (<http://www.cardu.com.tw>)

故辜濂松氏が自ら策定した企業トレードマークである2つのCが表現されている。台湾原生の動植物と現代デジタル芸術作品という取り合わせは、中国信託銀行の有する独特の企業観を反映しており、同行が有する企業精神と芸術的美学の統合を表している。この芸術的空間は中国信託本社ビルの訪問者に対し、台湾の土地に対する誇りや感動を呼び起こし、中国信託の企業理念である「生聲不息」を実感させている。

デジタル絵画と最先端技術素材が融合された、この360度室内デジタル美術装置は、山水画と台湾の原生動植物をモチーフとして、台湾の自然の美しさや四季の変化を映し出している。技術的な部分では、このデジタル美術装置は自然界に起きる変化を即時にデジタル演算することで、描かれる線や色、形や構図などが自然界の現象や動植物に近い動きをするようにプログラミングされている。

このデジタル芸術装置からは、四季折々の変化を反映しながら、鮮やかな色彩と繊細な姿で独特



写真2：「瀑布與松樹(滝と松)」と題されたデジタル美術(左側壁面)
出所：中国信託商業銀行提供

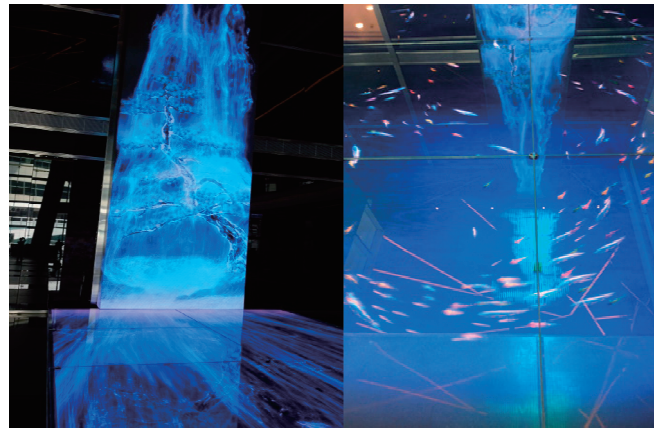


写真3：滝の手前の大きな池には魚が悠々と泳いでいる(中央地面)
出所：中国信託商業銀行提供

の美しさを有する台湾特有の原生動植物の姿が次々と表現されている。ロビーの左側壁面に描かれた台湾原生のクロマツを背景に、壁面をつたって5階の高さから地面に向かって、青い光を放った滝の水が落ちていく様子は、正に圧巻である。この「瀑布與松樹(滝と松)」という芸術作品は、故辜濂松氏が企業と国家の両方に貢献したことを表しているという。

「瀑布與松樹」の下にある中央の地面は、滝が流れ込む大きな池をイメージしているが、池のパネルに足を踏み入ると、水面に波紋が広がるという細かい仕掛けがある。このデジタルの池には、ニジマスやメダカ、タイワンキンギョやタナゴなど台湾原生の色とりどりの魚が自由に泳ぎ回っており、運が良ければ、トノサマガエルやタイワン

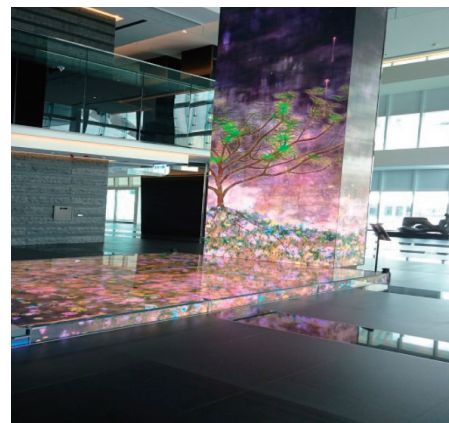


写真4：本社ロビーに広がる一面の花畑(右側地面)
出所：中国信託商業銀行提供

³ 「生聲不息」とは、音が鳴り止まずよどみなく続く様子を表している。

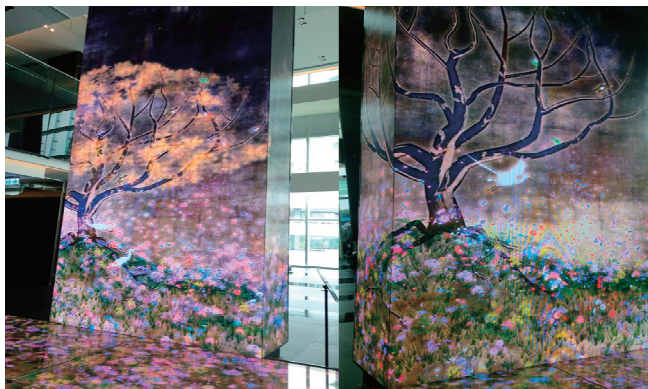


写真5：四季により色彩が変化し、時折鳥が飛び交う（右側壁面）
出所：中国信託商業銀行提供

サンショウウオ、台北樹蛙が出現する。

また、池の右側の地面には一面の花畑が広がり、マーガレット、セイヨウトドリソウ、ニイタカセキチク、ニイタカシモツケ、ニイタカマンネンダサオオバウマノスズクサ、タイワンヒヨドリバナやタカサゴユリなど、台湾原生の花や植物が咲き乱れている。トンボや紫斑蝶、フトオアゲハなどがこれらの花々の間を飛び回っている。

さらに、右側壁面には桜の木をモチーフにして、ピンクやオレンジ、赤などの花々が描かれ、ヤイロチョウ、キンバネホイビイ、タイワンシジウカラ、ニイタカキクイタダキ、ツバメなど色鮮やかな台湾原生の鳥が飛び交っている様子が見られる。季節により様相を変えるこの草地や花々には、持続可能な社会への配慮等、中国信託の社会貢献の理念が反映されているという。

この美術装置は芸術的価値も非常に高いが、特筆すべき点として、世界で初めてのデータ連動型システム「Data Link」⁴が採用されており、世界や台湾のデータや中国信託の企業データの数値が、出現する動植物の数量に反映されるという画期的なシステムを有している。

例えば、世界の人口数が滝の水量に反映され、

台北の気温により鳥が飛ぶ軌跡の色が変化する。また中国信託社員数が松の葉の数に連動しており、このオフィスビルで働く人数が樹木の葉の数に連動している。中国信託が支援した子供の数が草の数に反映され、社員のボランティア参加数が蝶の数に連動、同社が寄付を1万元行う毎に新しい花が一つ咲く。中国信託グループ企業数がマツボックリの数に反映され、中国信託のクレジットカード発行数が魚の数に連動している。中国信託の株価が上がるとトノサマガエルが増加し、株価が最高値をつけるとサンショウウオが発生する。

さらに、天井部分のデジタルパネルには、青い空に雲が浮かぶ様子が表されているが、オフィスビルが太陽光発電を行う発電量が、この雲の大きさと速度に連動しているという。

2. 中国信託商業銀行・文薈館

中国信託商業銀行本社ビル1階ロビーの奥に「文薈館」がある。入り口には同行創業者の辜振甫氏の胸像と辜振甫氏と辜濂松氏の若き日の写真が展示されている。入口から直進してすぐに広がる明るいフロアには、中国信託商業銀行発展の歴史や沿革などが年代ごとにパネル展示されており、当時の様子がしのばれる多数の貴重な資料が掲示されている。

文薈館の展示パネルによれば、中国信託は、



写真6：中国信託発展の歴史と沿革

出所：筆者撮影

⁴ 「Data Link」の詳細については、中国信託銀行の運営する「生聲不息」ウェブサイト (<https://www.ctbc-lobyart.com/>) を参照のこと。

1966年に中華証券投資公司として設立され、当時台北の繁華街の台北市館前路59号にあった安産物ビル5階120坪のオフィスから19名の社員でスタートしたという。1971年5月31日に中国信託投資公司と社名変更、同年7月9日に対外経営信託会社業務を開始した。同年10月に青島西路の自社ビルを購入し、翌月11日に事務所を移転したが、当時の職員数は98名であった。1978年には中国信託は着実に成長し、社員数は300名となり、信託資金は100億台湾元を突破した。社員が多くなったため、重慶南路一段の重慶ビルに本社を移したが、これが現在の城中支店となっている。

1980年代には台北市の発展と共に忠孝東路から東に向かって都市が急速に発展していた。中国信託は、1984年には社員が661名に達し、信託資金は400億台湾元規模となった。辜濂松元会長は、台北市東区地域が新興商業センターに生まれ変わっていくことを予想し、松壽路に信義ビルを建設、1996年に信義区に銀行では初めて同地に本社を移転し、信義地域の発展に貢献した。

2002年には、中国信託は金融ホールディングカンパニーに生まれ変わった。今度は、南港地域とグループ企業の永続的な発展のために、南港に9000坪の土地を購入、2014年に同地に本社ビルを移転した。

文薈館には、中国信託本社ビルの移転時期と当時の建物が模型で再現されている。さらに年代毎に、当時の一人当たりGDP額や経済成長率、消費者物価指数のマクロデータと共に、同社の資産

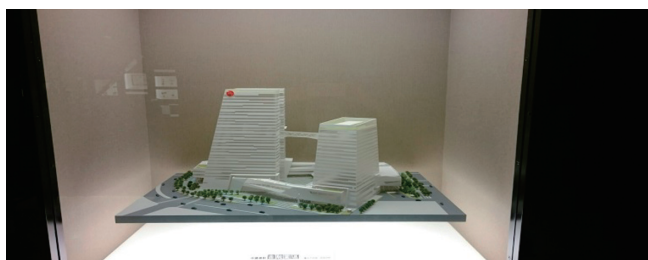


写真7：信義本社時代のビル模型

出所：筆者撮影

総額、貸出金残高、営業収入額、クレジットカード発行数などの中国信託の成長の推移がパネルで表示されている。また、奥にあるミニシアターでは、スクリーン前に10台のスクーターが設置され、前方スクリーンを見ながら、スクーターに乗った状態で、当時の街並みが体感できるようになっている。

また同行は1974年に台湾で初めてクレジットカードを発行した銀行であり、1989年には台湾初VISA提携クレジットカードを発行、2000年には台湾初のVISA提携ゴールドカード発行を行い、台湾での個人金融市場拡大に大きく貢献した。

また、文薈館の入り口から右手側の部屋は、前会長である辜濂松氏の功績を称えた「辜濂松紀念區」となっている。辜濂松紀念區のパネルの裏側に設置された3D映像装置からは、在りし日の辜濂松氏の姿が映し出されている。



写真8：中国信託の歴史が分かるミニシアター

出所：中国信託商業銀行提供



写真9：「辜濂松紀念區」

出所：筆者撮影



写真 10：旺年の辜瀛松氏と再会できる貴重な場所

出所：筆者撮影



写真 11：辜瀛松氏が政府から授与された勲章も展示されている

出所：筆者撮影

3D 装置からは辜瀛松氏の映像に合わせて、ご自身の肉声も再現されている。見るものに語りかけるような辜氏の立ち姿や趣味であったピアノの弾き語りなど、生前接点のあった方々には特に、往年の辜氏と出会える大変貴重な場所となっている。

その他、中国信託商業銀行信義区本社時代の辜氏の董事長室の模型のほか、台湾外交部から授与された「一等外交獎章」、日本政府から授与された「旭日重光章」等勲章や賞状、身に着けていたスーツや小物、文房具など辜氏の遺品や、ニューヨーク大学 MBA の修了証書や台湾総統（当時李登輝



写真 12：中国信託信義本社時代の辜氏の董事長室の模型

出所：筆者撮影

氏) からの特任大使任命書等の文書・資料、さらに中国信託の信義本社時代に辜氏が過ごした董事長室の再現模型など、辜氏の生前の功績が偲ばれる貴重な品々が多数展示されている。

～最後に～

辜振甫氏は、その豊富な日本人脈と日本語の高い能力と知性により、台湾工商協進会理事長等を務めるなど、日台経済交流の礎を築いた。文字通り日本と台湾の架け橋となり、日台断交前の 1971 年に勲一等瑞宝章・藍綬褒章を日本政府から叙勲を受けている。他方、同氏は中国の経済文化に関する高い教養をかわれ、1982 年蔣経国政権の中国国民党中央常務委員となり、1991 年には海峡交流基金会の初代理事長に就任するなど、実質的な対中交渉のトップとなった。当時の台湾では戒嚴令が解除されておらず、兩岸は依然として緊張していた。1993 年 4 月の「辜汪会談⁵」、1998 年 10 月の「辜汪面談⁶」にて、辜振甫氏の名声が中国大

⁵ 1993 年に中国海峡兩岸關係協會汪道涵会長とシンガポールで初のトップ会談を実現。当初辜汪会談では、双方の幕僚は立場が異なり、共通認識を構築することは難しいとの見方があった。辜氏は汪氏と二人だけの機会を利用して相互の歩みよりを提案したという。常に相手の状況を第一に考慮した辜振甫氏は、当時、余人を以て代えがたいと評された。

⁶ 1998 年に上海で汪会長と再び会談、北京で江沢民中国共産党総書記とも対面した。

陸でも広がったという。さらに、李登輝政権では総統府資政を務め、APEC 等国際会議にも参加するなど、台湾の国際外交のキーマンとなった。

辜振甫氏他界後、一族の後継者として数多くの功績を残した辜濂松氏はニューヨーク大学 MBA 取得後、その豊富な人脈を生かし、中国信託の投資信託業務の拡大に尽力した。辜氏は、世界の金融関係者から Jeffrey Koo(ジェフリー・クー)と呼ばれ、アジアの主要な銀行オーナーとして尊敬されており、2000 年以降は APEC の使節団長を務めるなど公務にも邁進した。また、辜振甫氏が遺した日台貿易経済交流団体である台日商務協議会（現台日商務交流協進会）会長として、日本と台湾の貿易経済交流に大きな貢献を行い、2012 年春の外国人叙勲により、日本政府から旭日重光章を授章している。栄誉ある叙勲を受けたまさに同じ年の 2012 年 12 月 6 日、辜氏は愛して止まないニューヨークの地で、惜しまれながら 79 歳の生涯を終えた。

「文薈館」で上映される辜濂松氏 3D 映像フィルムにて、最後に辜氏が語るメッセージには感動を禁じ得ない。このメッセージは、前出「辜濂松先生追悼集」冒頭の辜氏の挨拶文から引用されている文章であるが、何故辜氏が、五大家族の中で最も継続的に事業を拡大し繁栄したのか、理解する一つの手掛かりとなるだろう。

「一人一人が自分の能力の範囲内でできる限りの努力をし、そして実行方法を練り、具体的に事を行うこと。決して良心に恥じることはしない。これができれば、その人は家庭の中で、父母の良い息子であり、奥さんの良い夫であり、子供たちの良い父親だ。家庭は非常に円満で愉快だ。私はこれこそ「成功」だと思う。」

中国信託商業銀行のホールディングカンパニーである中国信託金融控股 (CTBC) は、2014 年 6 月 5 日に東京スター銀行を M&A で株式取得を行った。

CTBC のグループ企業となった東京スター銀行の会長には、CTBC 江丙坤最高顧問が就任した。江丙坤氏の会長就任記念の祝賀会が、同年 10 月 20 日夜ホテルオークラにて開催され、日華議員懇談会平沼赳夫会長、台北駐日経済文化代表処沈斯淳代表、交流協会大橋光夫会長が挨拶を行った。

当日江会長は次のようなスピーチを行った。「日本と縁が深い辜振甫先生、辜濂松先生にとって、日本での拠点設立は長年の夢でございました。特に、辜濂松元会長が日本で CTBC が基盤を確立することは悲願であり、その意思を継いで、東京スター銀行の会長就任を果たせたことを非常に光栄に思っております。」その後、故辜濂松夫人の辜林瑞慧氏も壇上に上がり、東京スター銀行代表執行役頭取入江優氏と 3 人で固い握手をした。

辜振甫氏、辜濂松氏は他界してなお、日台交流の礎を担うキーパーソンであり続けている。

(参考資料)

黄天才、黄肇行 (2005)「勁寒梅香：辜振甫人生紀實」聯經出版公司発行

「辜濂松先生追悼集」(2013)中国信託商業銀行発行

* 本稿は、黄天才、黄肇行 (2005)「勁寒梅香：辜振甫人生紀實」(聯經出版公司発行) 及び「辜濂松先生追悼集」(2012)の記述内容に加え、中国信託商業銀行董事長室へのヒアリング内容を基に執筆を行った。本原稿執筆に当たっては、中国信託金融ホールディング江丙坤最高顧問、黄章富副総経理及び中華経済研究院顧問の辜晏宏氏に多大なご協力のご知見をお借りした。また今回の調査にご同行頂いた、台中東海大学劉仁傑教授、新潟大学経済学部岸保行准教授、法政大学グローバル教養学部福岡賢昌准教授及び、我々の調査事業に対して共同研究助成を頂いた公益財団法人交流協会に心より感謝を申し上げます。